「ミスを素直に認めろ」「脳にワイヤ突き刺し事故」日本医大病院を遺族が悲痛告発

写真／伊藤隼也

「ショックのあまり、頭の中が真っ白になりました。(手術ミスが原因で死亡した)事実を知ったときは、怒りというより悲しみのほうが大きかった。ようやく悲しみが癒えようというときに……、まさに"悲しみの復習"をしているようでした。病院には、いつまでもこんなことを続けてほしくありません」

と、怒りをも超えた、やりきれない胸中を父親は本誌に告白した。

東京・文京区にある日本医科大学付属病院で、骨折したあごの骨をワイヤで繋ぐ手術を受けた女性に対し、執刀医が誤ってワイヤを脳に突き刺す医療事故が起こり、術後2日で死亡していたことが明らかになった。

'97年12月8日、埼玉県在住の会社員(58)の長女(当時20)は橋から転落し、あごの骨を骨折。地元の病院を通じ、あごの固定手術のため日本医大病院に入院した。

「入院当初は、自分でも歩けるし、意識は確かでした。娘はエアロビのインストラクターを目指していたので、入院して太ったことを気にして『ダイエットしなきゃ』といっていたくらいです。だからなんの心配もしていませんでした」(父親)

ところが、15日の手術直後から容態が急変、2日後の17日に死亡した。直後の病院側の説明は、「DIC(血小板の数が減り出血が止まらない症状)による多臓器不全」で、「DICを引き起こした原因は不明」という無責任なものだった。ワイヤが脳に刺さった事実は、まったく遺族に伝えられなかった。

しかし、2年半経った昨年6月、父親宛てに病院関係者を名乗る匿名の封書が送られてきたのである。

「中には手術ミスを告発する手紙とレントゲン写真・CTのスライドが入っていました。文面では名指しで、手術中に執刀医が、誤って娘の脳にワイヤを刺してしまった事実が書かれていました。ビックリして腰を抜かしましたね。そんなことやっていたのかって……」

その後、告発文を送ってきた人物から遺族に連絡が入り、長い間事実を隠していたことを謝罪する言葉があった。告発したのは、手術当日に立ち会った医師の一人だったのである。この医師は手術中、執刀医に「先生、頭蓋内に(ワイヤが)入ってるよ」と訴えたが、取り合ってもらえず、術後の医局会議でも再び指摘したが、誰もが口をつぐんでいたという。

父親が悲しみに声をつまらせながらいう。

「女房に事実を伝えると、『いまさら何よ』と、ショックで泣いちゃって泣いちゃっ

▲ワイヤの先端が脳に刺さっていることがわかる。この場所は、まさに脳(位置)であり、刺さっていることは明確だ

◀左側に見える白い筋状のものが出血部分だ。「おそらくワイヤが引き抜いた跡の残骸」だろうに、なぜ出血が止まったのでしょう?(遺族)

転載・二次使用禁止

転載・二次使用禁止

▲遺族の父親は事故発覚後、初めて単独インタビューに応じ、レントゲン写真を前に長女の思い出を語った。左側にある腕時計とエアロビの教本は彼女の形見だ

て。死なないですんだかもしれないといわれても、二人で沈黙するしかなかった……」

遺族はレントゲンとCTをもとに複数の専門家の意見を聞き、医療事故が起こったことを確信。昨年12月には、カルテなどの証拠保全をし、今年1月初旬、日本医大に事故調査委員会の設置を求めるなど、真相究明に乗り出している。

レントゲン写真やCTを見た慶應大学医学部脳神経外科の塩原隆造客員教授は、こう解説する。

「間違いなく脳にワイヤが刺さっています（写真右上）。CT（写真右下）を見ても、脳の一部に出血が認められます。おそらく誤ってワイヤを1cm弱ほど突き刺したためでしょう。しかし、このことが直接の死因にはなりません。テクニカルなエラーは外科手術では皆無ではないため、問題は、その後適切な処置がなされたかどうかでしょう」

しかし、病院側は1月22日に行われた会見で、「事故はなかった」と全面否定。あらためて本誌が病院側に取材を申し込んだところ、「脳にはワイヤが刺さっていなかった、という確証を得ています」と一貫して否定の姿勢を崩さない。だが現在、事実関係の調査を進めており「結果は情報開示いたします」との回答があった。

「誰でも間違いはあるし、娘がもう帰ってこないことは受け入れるしかありません。ただ、間違いがあったなら、その間違いを認めてほしい」

遺族は病院側の調査回答によっては、提訴も考えているという。